



川中島合戦図 (吉沢488-28-2)

当館では六万八千点以上の古文書を所蔵しています。その中には絵図も多数含まれており、閲覧を希望される方も多いです。今回は「川中島合戦図」(吉沢四八八―二八―二)を取り上げご紹介いたします。

最近、大河ドラマ等を通して、歴史への興味・関心を深める方も多く感じます。

古文書倶楽部

【発行】

秋田県公文書館

2018.1

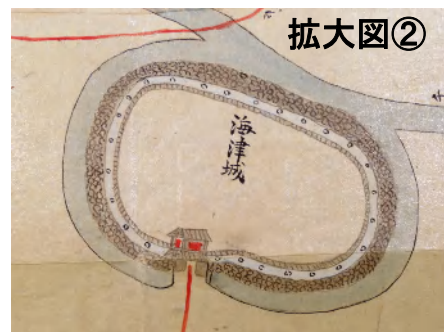
第81号

新年、あけましておめでとうございます。
本年もどうぞ公文書館及び古文書倶楽部
をよろしく願いたします。



拡大図①

昨年十二月まで放送された大河ドラマ『おんな城主 直虎』で松平健が演じていた武田信玄。「戦国最強」と恐れられた騎馬隊を有し武名を高めた彼の最大のライバル・上杉謙信との川中島の戦いは非常に有名です。この絵図には、その戦いに参戦した両軍の武将たちの名前が多数見られます。左の拡大図①をご覧ください。例えば、この戦いで戦死するまで武田軍の副将として兄の信玄を支え続けた武田典厩(信繁)、武田家の滅亡まで信玄・勝頼の二代に仕えた跡部大炊助(勝資)などの名前が見られます。また、永禄四年(一五六一)に築城された海



拡大図②

津城(拡大図②参照)も描かれています。この城は四度目の戦闘の際に信玄が山本勘助に命じて築城させた城で、のちに松代城と呼ばれるようになりまし。信玄は二万人の兵を率いて海津城に入り上杉

軍と対峙しましたが、この時は苦戦を強いられ、弟の典厩や山本勘助らが戦死しました。

ところで、この絵図が描かれたのは幕末の慶応二年(一八六六)です。川中島の戦いが行われたのは今から四五〇〜四六〇年程前の十六世紀半ばです。筆者はなぜ、三〇〇年も昔の出来事を幕末の慌ただしい最中に描こうとしたのか・・・という疑問は浮かびますが、この絵は筆者の吉沢主税清恭から村上大内蔵に送られたものだそうです。村上氏の求めに応じて吉沢氏が描いたのか、何らかの理由で吉沢氏が描いたものに村上氏が興味を持ったのか。それ以上のことは推測するしかありません。

文字があれば読み取りは簡単ですが、書かれている文字が少ないからこそ、こちらの想像も膨らみ、さらに探求意欲が増すこともあるでしょう。一部の絵図については、当館のデジタルアーカイブのサイトで調べることも可能なので、ぜひご利用ください。

【村山純一】

古文書こぼればなし

修復による文書の破損

「過ぎたるは…」

酸性紙にインクで書かれた西洋の古文書と違い、和紙と墨を用いた日本の古文書は経年変化に強く、保存しやすいといえます。それでも、長い間に水をかぶったり虫に喰われたりしたために破損がひどく、修復を必要とするものもあります。

しかし、なんでもかんでも修復をすればいいというものではありません。余計な修復によって、史料としての性格が「破損」されることもあります。その例を、当館が所蔵する『北家日記』（AK二二二—〇一〇〇—一七六五）でみてみましょう。

同史料は、当館の設立にともない、旧県立秋田図書館から移管されました。全七六五冊からなりますが、その時点でそのすべてに裏うちがされ、表紙には紺色の厚紙が新たに付されています（一巻から十四巻までは、古いものと思われまゝ）。もちろん、冊子によっては虫喰いのひどいところがありますが、全体としては保存状態はよく、裏うちを必要とされる部分はそれほど多くはありません。

古文書倶楽部 第81号 (2018年1月号)
裏うちをすると、次のような問題点が生じます。①紙の質がわからなくなる、②簿冊が本来の倍以上の厚さになり、原型がそこなわれる、など。綴じ目の部分が読めなくなったり、写真

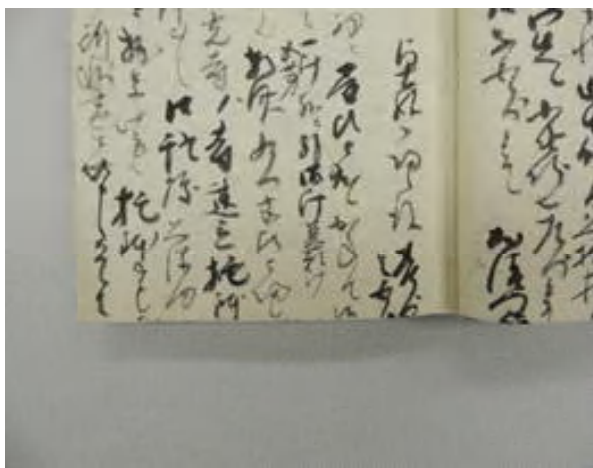
撮影がしづらくなったりします。実際一丁ごとの紙が厚くなり、両脇を文鎮などではおさえきれない状態になっていきます。

写真①の①を見て下さい。文字の下部分が途中で途切れています。これは、修復を請け負った業者が、修復後の「みてくれ」をよくするために、史料の下部を裁断してしまった結果です。無残としかいいようがありません。

写真②は、一見なんでもないように見えます。しかし、青い表紙は後付けで、用紙は現代のものです。その上に白くて四角い部分が見えます。この上には、文字が書かれています。実は、これは、実物の日記の表紙の一部なのです。修復者は、体裁をすべて統一するために、わざわざ原本の表紙の文字が書かれた部分を切り取って、後付けの表紙に貼り付けているのです。もしかすれば、表紙部分の破損が酷かったのかもしれないませんが、それならそのままの状態での破損の酷いところだけを修復すればすむはず。このような状態に変貌してしまった冊子は何冊もあります。これらの史料は、もう元のかたちにもどすことはできません。それを思うと、この「修復」は「破壊」行為に近いものといわざるをえません。

一つの古文書は、世界にそれひとつしか存在しないものです。私たちが勉強のために利用する場合も、丁寧な扱いを心がけることが大切です。慣れるほどに丁寧な所作を忘れないこと、それが歴史資料を扱う者の義務だと思います。

【金森正也】



写真①



写真②